

創世記15 創世記8章1節～22節

「洪水の終わり」

イントロ：

1. 前回までの復習

- (1) 第3の区分(トルドット)「これはノアの歴史である」
- (2) このトルドットの構造：antithetical parallelism 対照対句法がある。
 - A 6：11～13 神は人類を滅ぼすことを決意する。
 - B 6：14～22 ノアは箱舟を造る。
 - C 7：1～9 神は箱舟に入るように命じる。
 - D 7：10～16 洪水が始まる。
 - E 7：17～24 洪水が150日続く。山々が水で覆われる。
 - F 8：1a 神はノアを覚えておられた。
 - E 8：1b～5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
 - D 8：6～14 地は乾き始める。
 - C 8：15～19 神は箱舟から出るように命じる。
 - B 8：20 ノアは祭壇を築く。
 - A 8：21～22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 神はノアを覚えておられた。
- (2) 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。
- (3) 地は乾き始める。
- (4) 神は箱舟から出るように命じる。
- (5) ノアは祭壇を築く。
- (6) 神は人類を滅ぼさないことに決める。

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。

- (1) 神の守りの確実性
- (2) 信仰と努力のバランス
- (3) 神のジレンマ(十字架の必然性)

このメッセージは、大洪水物語を通して、クリスチャン生活の本質を明らかにしようとするものである。

I. F 8 : 1a 神はノアを覚えておられた。

1. 「心に留める(覚えている)」の意味

- (1) 「忘れていない」ということではない。
- (2) 心に留めている対象に対する「行動」を指す言葉である。

2. 他の聖句の例

- (1) 創19:2 「神はアブラハムを覚えておられた」: ロトの救出についての言及
- (2) 出2:24 「神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」: イスラエルの民の救出についての言及
- (3) エレ2:2 「さあ、行って、主はこう仰せられると言って、エルサレムの人々の耳に呼ばわれ。わたしは、あなたの若かったころの誠実、婚約時代の愛、荒野の種も蒔かれていない地でのわたしへの従順を覚えている」: エルサレムの救出についての言及
- (4) エレ31:20 「エフライムは、わたしの大事な子なのだろうか。それとも、喜びの子なのだろうか。わたしは彼のことを語るたびに、いつも必ず彼のことを思い出す。それゆえ、わたしのはらわたは彼のためにわななき、わたしは彼をあわれまずにはいられない。——【主】の御告げ——」: エフライムに差し出された神の恵みについての言及
- (5) ルカ1:54~55 「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです」: メシアをイスラエルの民に送るといふ約束についての言及

3. 契約関係を示す言葉

- (1) 「心に留める(覚える)」という言葉は、契約関係を前提として語られる言葉。
- (2) この時点では、ノア契約はまだ結ばれていない。
- (3) その預言は創6:18にある。「しかし、わたしは、あなたと契約を結ぼう」
- (4) 神はノア契約のゆえに、箱舟の中にいた人間と動物を守るために行動を起こされた。
- (5) 私たちはイエス・キリストにあって神と契約関係に入った。
- (6) それゆえ、神は私たちに「心に留め(覚え)」てくださる。

II. E 8 : 1b~5 洪水が150日後に引いていく。山々が現れる。

1. 地から水が引き始める。

- (1) 神が風を使ってそうさせた。

2. 8章1節の内容は、創世記1:2とよく似ている。

- (1) 創世記8章は、創世記1章~2章に記された「天地創造のテーマ」の再現である。

- (2) 渴いた土地が現れ、そこに植物が生長するというテーマ
- 3. 2節では、地下の水源が閉ざされ、天からの雨がとどめられている。
- 4. 3節では、水はしだいに地から引いている。
 - (1) 具体的には、150日の終わりに減り始めた。
 - (2) 水が蒸発によって減り始めた。
- 5. 4節では、箱舟はアララテ山の上にとどまった。
 - (1) 第7の月の17日
 - (2) 水位が相当下がった。
 - (3) アララテ山の標高は、5000メートル以上もある。
 - (4) 山頂にとどまったと考えなくてもよい。
- 6. 5節では、水は第10の月まで、ますます減り続けた。
 - (1) 第10の月の1日に、山々の頂が現れた。
 - (2) 最初は高い山々が、次に低い山々が姿を現している。

III. D 8 : 6 ~ 14 地は乾き始める。

- 1. ノアは、40日の終わりになって、箱舟の窓を開き、鳥を放った。
 - (1) 150日から数えて、40日後。
 - (2) 鳥は黒い色をした野鳥で、聖書では「きよくない鳥(汚れた鳥)」に分類されている。
 - ①レビ11:15、申命記14:14など参照。
 - ②ルカ12:24では、鳥は神によって養われている。
 - ③I列17:6では、鳥がエリヤに食物を運んでいる。
- 2. 「するとそれは、水が地からかわききるまで、出たり、戻ったりしていた」(新改訳)
 - (1) 鳥は、水の上に浮かんだ動物の死骸を食べて生きることができた。
 - (2) 洪水の後なので、あちこちに動物の死骸が漂っていた。
 - (3) 従って、箱舟に帰って来る必要はなかった。
 - (4) 鳥は、動物の死体の上に留まり、あちこち飛び回った。
- 3. 鳩を放った。
 - (1) 鳩は白い色をした飼育可能な鳥で、聖書では「きよい鳥」に鳥に分類されている。
 - (2) 鳩は、積極的なイメージを表現するために用いられている。
 - ①若い時の目の美しさ(雅歌1:15、4:1、5:12)
 - ②愛の象徴(雅歌2:14、5:2、6:9)
 - ③長距離を飛ぶ鳥(詩篇55:6、イザヤ60:8、ホセア11:11)
 - (3) ノアの行動
 - ①これまでノアは、神の啓示によって行動してきた。

②ここでは神からの語りかけがないので、普通の方法で状況を確認しようとした。

③神の啓示を通し、また、人間の方法を通して状況判断をするというバランス。

(4) 鳩は、水の上に浮かんだ動物の死骸を食べて生きることができない。

(5) また、鳥のように頂上を好むのではなく、谷に生息することを好む。

(6) 鳩が帰って来たことは、まだ水が地表を覆っていたことを示している。

4. 2度目に放った鳩

(1) 7日待って

(2) オリーブの若葉をくわえて帰って来た。

(3) 高地には水がなくなっていることが分かった。

5. 3度目に放った鳩

(1) なお7日待って

(2) 鳩は戻って来なかった。

(3) 谷間の地区も乾いた。

6. 地は乾いた。

(1) ノアの生涯の601年の第1の月の1日

(2) 箱舟のおおいを取り去り、外をながめると、地の面は乾いていた。

①おおいとは、箱舟の上にかぶせたものであろう。

②それでもノアは、さらに57日を箱舟の中で過ごし、神のことばを待った。

③第2の月の27日、地は渴き切った。

(3) ノアが箱舟の中にいた期間は、371日、ちょうど53週だった。

7. 私たちへの教訓

(1) 神の啓示と、自分の判断とのバランス

(2) 肝心な点においては神の指示を待つ。

IV. C 8:15~19 神は箱舟から出るように命じる。

1. 神の命令とノアの従順

(1) 箱舟に入れと神が言われた時、ノアはそれに従った(6:18)

(2) 今度は、箱舟から出よとの命令が下り、ノアはその命令にも従った。

2. ノアの家族、そして箱舟にいた鳥や家畜、地をはうものなどが出て来た。

(1) 大洪水を生き延びたこの少数の人々と生き物の群には、新しい使命が与えられた。

(2) 彼らは、新しくなった地に満ちるようにとの命令を受けた。

「…それらが地に群がり、地の上で生子、そしてふえるようにしなさい」

2. 大洪水は、バプテスマの型である。

(1) I ペテロ3:20~21

「…わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。そのことは、
今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです」

(2) 私たちも、バプテスマという儀式を通過し、靈的に増え広がるように期待されている。

V. B 8 : 20 ノアは祭壇を築く。

1. 箱舟を出たノアが最初にしたことは、主を礼拝すること。
2. 彼は、祭壇を築いた。
 - (1) 「祭壇」という言葉が初めて登場する。
 - (2) 神の臨在が現れていたエデンの園は、洪水で滅びた。
 - (3) 神の臨在に出会う場として、また犠牲を捧げる場として、祭壇が必要になった。
3. すべてのきよい動物や鳥のうちから取り、祭壇の上で全焼のいけにえとして捧げた。

VI. A 8 : 21~22 神は人類を滅ぼさないことに決める。

1. 主は、再びこの地をのろうことはすまいと約束された。
2. その理由は、「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」というもの。
 - (1) かつては、これが地を滅ぼす理由となった。
 - (2) ここでは、それが地を滅ぼさない理由となっている。
 - (3) 大洪水は、神の義を示すために起こった。
 - (4) 人間が罪を犯すたびに大洪水が起こるなら、神は何度も同じことをせねばならぬ。
 - (5) これ以降は、神の憐れみと恵みが示される。
3. この祭壇と全焼のいけにえは、カルバリの丘の十字架を予表している。
 - (1) 究極的には、神は御子イエスの贖いの死によって、私たちを滅びから解放される。
 - (2) 神の義と愛が交差したところに、十字架が立つ。

結論

1. 神の守りの確実性
 - (1) 契約概念の理解
2. 信仰と努力のバランス
 - (1) 神とともに人生を作り上げていく。
 - (2) バプテスマを受けて以降の物理的、かつ靈的拡大。
3. 神のジレンマ（十字架の必然性）
 - (1) 神の義と愛が交差したところに、十字架が立つ。